



日中音声学研究

—母校廈門大学設立 85 周年を記念して

愛知学院大学教養部
朱 新建

【キーワード】

入破音 音調 アクセント 変調 統語機能

はじめに

中国語廈門方言に関する先行研究では、いずれも廈門語の頭子音である **b/m**、**l(d)/n**、**g/ŋ** については記述が曖昧であり、不十分であると考えられる。筆者は九州大学研究生時代から言語学の角度からこの研究にとりかかり、名古屋大学大学院時代に研究を継続し、廈門語話者の日本語発音を分析したり、海南島へ海南島閩方言にある入破音の現地調査をしたり、ベトナムへ入破音の現況調査をしたりした上で、廈門語の頭子音 **b/m**、**l(d)/n**、**g/ŋ** は有声破裂音ではなく有声入破音 (implosive) **ɓ/m**、**ɗ/n**、**ɡ/ŋ** であると結論付けることができた (本稿で使用する音声記号は IPA に従う。以下同)。

一方、日本語アクセントの習得については中国における日本語教育を概観しても、非常に重視しているとは言いがたい。日本語のアクセントは中国語の声調のように辞書形の声調を覚えればすむのではなく、辞書に示さない複合語や文アクセントを習得しなければならないと考えている。

1. 音声の研究

日本語学習及び日本語教育においては、言語構成の三要素である音声・語彙・文法の内、まず音声習得の指導が第一であり、それに関わる音声学の研究と教材開発は欠くことができない。とりわけ中国における日本語音声教育は、中国語の標準語である北京語を母語とする学習者よりも、中国語各方言を母語とする学習者のほうが多く、学習者にはそれぞれの母語についての自覚と反省が必要であろうし、教育者にはそれぞれの方言話者に対する適切な教授法が要求されるであろう。これにふまえて、筆者のこれまでの日中音声学研究の一部を示しながら音声教育の重要性を述べたい。

1.1. 日本語歯茎子音の研究

ラ行音は日本語歯茎子音の中でも習得は難しい音声の一つで、**r** と表記するこの弾き音 [r] は鼻音の後に来ると、アナウンサーなどが放送で強調してしゃべるように破裂が強すぎると、破裂音の [d] に聞こえることはよくある。

例えば、信頼→[ɕin dai] (寝台)、本来→[hɔn dai] (本題)、翻弄→[hɔn do:] (本堂)。

歯茎の側面音の [l] に近い音色であるが、舌の両側から呼気が流れ出る [l] に対して、呼気が舌の上から流れ出るため、呼気が強すぎると、同じ歯茎の破裂音の [d] になりやすいわけである。ところで、弱い弾き音の [r] はまた廈門語の [l] に似ているところが面白い。この日本語の弾き音 **r** の特徴を筆者独特の表記として [ɽ] と表記する。日本語の音声のまとめとして次のように示しておく。

日本語の音素と代表的異音

一. 母音音素と代表的異音

/a/ → [a] ア段音, ア段拗音

/i/ → [i] イ段音

/u/ → [u] ウ段音 (下記以外), → [ü] / {s, t, z} __ス, ツ, ズ, ヅ

/e/ → [e]

/o/ → [o]

二. 子音音素と代表的異音

/p/ → [p] パ, プ, ペ, ポ, → [pj] / __ {i, j} ピ, ピヤ行音

/b/ → [b] バ, ブ, ベ, ボ, → [bj] / __ {i, j} ビ, ビヤ行音

/m/ → [m] マ, ム, メ, モ, → [m̥] / __ {i, j} ミ, ミヤ行音

/t/ → [t] タ, テ, ト, → [tɕ] / __ {i, j} チ, チャ行音, → [ts] / __ ü ツ

/d/ → [d] ダ, デ, ド, → [dz] / __ {i, j} ズ, ズヤ行音 → [dz] / __ ü ヅ

/n/ → [n] ナ, ヌ, ネ, ノ, → [n̥] / __ {i, j} ニ, ニヤ行音

/r/ → [r] ラ, ル, レ, ロ, → [ɽ] / __ {i, j} リ, リヤ行音



- /k/→ [k] カ, ク, ケ, コ, → [k] /__ {i, j} キ, キヤ行音
 /g/→ [g] ガ, グ, ゲ, ゴ, → [g] /__ {i, j} ギ, ギヤ行音, → [ŋ] カ, ク, ケ, コ (語中), → [ŋj] /__ {i, j} キ, キヤ行音 (語中)
 /h/→ [h] ハ, ヘ, ホ, → [ç] /__ {i, j} ヒ, ヒヤ行音, → [ϕ] /__ ɰフ
 /s/→ [s] サ, ス, セ, ソ, → [ç] /__ {i, j} シ, シヤ行音
 /z/→ [dz] ザ, ズ, ゼ, ゾ, → [dz] /__ {i, j} ジ, ジャ行音

三. 特殊音素と代表的異音

- /N/→ [m] /__ {p, b, m}, → [n] /__ {t, d, n, r}, → [ŋ] /__ ɰ, → [ŋ] /__ {k, g, ŋ}
 /Q/→ [p:] /__ p, → [t:] /__ t, → [k:] /__ k, → [s:] /__ s, → [ç:] /__ ç
 /R/→ [:] /V__

四. 半母音音素と代表的異音

- /j/→ [j] /w/→ [w]

【注】 [pj], [bj]及び[ɲ], [ŋ], [tç], [dz], [k]はいずれもそれぞれの口蓋化の表記である。

1.2. 厦門語頭子音b/m, d/n, g/ŋの研究

羅常培 1956をはじめ、陳榮嵐・李熙泰 1994、周長楫・歐陽憶耘 1998 などはいずれも厦門語の頭子音 b/m、l(d)/n、g/ŋは有声破裂音であると記述されている。

【表 1】 厦門語子音体系の記述

羅常培 1956 『厦門音系』				朱新建 1992『厦門語と日本語の音声の比較』				
p	p'	b	m	p	p'	ɸ	(m)	(ϕ)
t	t'	l	n	t	t'	ɗ	(n)	l (ɸ) (r)
k	k'	g	ŋ	k	k'	g	(ŋ)	
ʔ			h	ʔ				h
ts	ts'		s	ts	ts'		s	(ç) (ç)
tç	tç'	dz		tç	tç'	dz		
陳榮嵐・李熙泰 1994 『厦門方言』				周長楫・歐陽憶耘 1998 《厦門方言研究》				
p	p'	b	(m)	p	p'	b	m	
t	t'	d	(n)	t	t'	l	n	
k	k'	g	(ŋ)	k	k'	g	ŋ	
			h					h
ts	ts'	dz	s	ts	ts'		s	

それならば、厦門語話者は困難を感じることなく日本語の有声破裂音を習得することができると思われる。実際、筆者の母語である永州方言には有声破裂音が存在するため(1.3を参照されたい)、筆者は学生時代に北京語話者などが困難を感じる日本語の有声破裂音は難なく習得したと記憶しているが、厦門語話者の場合はやや違って、日本語の有声破裂音を習得する際に十分な破裂ができずに、困難を感じる事がしばしば見られる。

例えば、貧乏→[bim poi:] びんぼう 電車→[ten çə] でんしゃ 運河→[uŋ ka] うんが

これについて筆者は、九州大学研究生時代から言語学の角度からこの研究にとりかかり、名古屋大学大学院時代に研究を継続し、厦門語の頭子音 b/m、l(d)/n、g/ŋは有声破裂音ではなく有声入破音ɸ/m、ɗ/n、g/ŋであると結論付けることができた。と前述したが、最近の新しい研究でも丁邦新・張双庆 2002などに指摘があったように、歴史上、呉越時代に始まった言語交流と言語融合によって、呉方言や浙江省に分布する閩方言には現在のベトナム語にある入破音が残存していることが証明されており、陳榮嵐・李熙泰 1994に述べられたように、福建省はかつての閩越国、東南越の地であったため、現在のベトナム語の祖語を話す原住民と東呉や河洛からやってきた漢人との長い歴史の言語交流と言語融合があったため、閩南方言の代表方言である厦門方言にも入破音が残存している歴史的な理由である(1.4を参照されたい)。厦門方言音声のまとめとして次に示しておく。



厦門語の音素と代表的な異音

一. 母音音素と代表的異音

- /a/ → [a] / {i, u} __ {i, u, n}
- /i/ → [i] / {u, a, ua,} __ {a, u}
- /u/ → [u] / {i, a, ia} __
- /e/ → [e]
- /o/ → [ɤ] /i__, → [o]
- /ɔ/ → [ɔ]

二. 子音音素と代表的異音

- /p/ → [p]
- /p'/ → [p']
- /b/m/ → [b] /__v, → [m] /__ṽ
- /t/ → [t]
- /t'/ → [t']
- /d/n/ → [d] /__v, → [n] /__ṽ
- /l/ → [l̥], → [r] /__ {u, a, e, ɔ, j}
- /k/ → [k]
- /k'/ → [k']
- /g/ŋ/ → [g] /__v, → [ŋ] /__ṽ
- /h/ → [ɸ] /__u, → [ç] /__i, → [h] /__ {a, e, o, ɸ}
- /c/ → [ts] /__i 以外, → [tɕ] /__i
- /c'/ → [ts'] /__i 以外, [tɕ'] /__i
- /s/ → [s] /__i 以外, → [ɕ] /__i

三. 音節末尾音

- /-m/ → [-m] / {a, i, ia} __
- /-n/ → [-n] / {a, i, ia, u, ua, ɔ} __
- /-ŋ/ → [-ŋ] / {i, ia, io, io} __
- /-p/ → [-p] / {a, i, ia} __
- /-t/ → [-p] / {a, i, ia, u, ua} __
- /-k/ → [-k] / {a, i, ia, io, io} __
- /-ʔ/ → [-ʔ] / {a, i, io, u, ua, ue, ui, e, o, m, ŋ} __

四. 半母音

- /j/ → [j]
- /w/ → [w]

1.3. 永州方言の有声破裂音の研究

永州方言は有声破裂音や有声摩擦音が存在することが特徴である。湘方言に属する方言であるが、三国時代に張飛が水兵を訓練した地でもあることから、吳方言の影響は大きい。音声体系は北京方言と比較すると次のようになる。

【表 2】 北京方言と永州方言の子音体系

北京方言				永州方言				
p	p'	m	f	p	p'	b	m	
t	t'	n	l	t	t'	d	n (l)	
k	k'		x	k	k'	x	ɣ	ŋ
tɕ	tɕ'	ɕ		tɕ	tɕ'	ɕ	ʒ	
tʂ	tʂ'	ʂ	ʐ	tʂ	tʂ'	ʂ	ʐ	
ts	ts'	s		ts	ts'	s	z	



1.4. 中国語に見られる入破音の研究

現代中国語に見られる入破音は中国語の北方方言にはなく、南方方言にしか見られない特殊な音声現象である。

中国語南方方言の閩方言圏、呉方言圏に入破音の存在が認められ、近年、その研究が注目されている。閩方言圏、呉方言圏は地理的には歴史上、紀元前17世紀の商の時代に越ができ、紀元前11世紀の西周の時代に呉ができ、紀元前7世紀の春秋戦国時代から秦の時代まで呉越、閩越、駱越、東甌、西甌のあった地であり、いわゆる古代の百越、駱甌の地であった。今の越南（ベトナム）語圏、侗台語圏は古代では駱越、西甌の地であり、その言葉に周知の入破音を特徴としているように、かつての呉越、閩越、東甌の地だった閩方言圏、呉方言圏に入破音が存在するのは何の不思議もない訳である。中国語に見られる入破音は何千年もの漢民族と周辺民族との文化の交流、融合の証拠の一つであると言えるであろう。

【表3】 中国語に見られる入破音分布分類表

分 類	閩 方 言 圏		呉 方 言 圏	
	海 南 方 言	厦 門 方 言	浙 江 南 部 方 言	上 海 周 辺 方 言
体 系	ʙ	d' g'	ʙ	d'
鼻音化型		ʙ/m d'/n g'/ŋ	ʙ/m d'/n	
非鼻音化型	ʙ d' g'			ʙ d'

参考の為にベトナム語の音声体系を示しておく。

【表4】 ハノイ方言子音体系表

		両唇音	唇歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無気音	p		t			k	
	有気音			t'				
入 破 音		ʙ		d'				
鼻 音		m		n		ɲ	ŋ	
摩擦音	無声音		f		s		x	h
	有声音		v		z		ɣ	
破 擦 音						ts		
側 面 音				l				
末 子 音		-p, -m	-t, -n			-ɲ, -k	-k, -ŋ	

【表5】 ホーチミン方言子音体系表

		両唇音	唇歯音	歯茎音	後部歯茎音	そり舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無気音	p		t				k	
	有気音			t'					
入 破 音		ʙ		d'					
鼻 音		m		n			ɲ	ŋ	
摩擦音	無声音		f		s	ʃ		x	h
	有声音					ʒ		ɣ	
破 擦 音							ts		
側 面 音				l		l̥			
末 子 音		-p, -m	-t, -n				-ɲ, -k	-k, -ŋ	

2. 音調の研究

「音調」という術語は、厦門大学大学院時代に、恩師の黄国雄先生が、日本語の「アクセント」という言葉を訳すときに使った訳語であるが、今思えば、中国語の「声調」に対して、日本語の「アクセント」は本質が異なるため、当時権威的な雑誌に挙げた「重音」という訳語を否定し、「音調」という言葉を使ったことは独創的で印象的であった。

日本における言語学研究や音声学研究で「音調」という術語を使ったのは、著名な言語学者で、日本言語学会先代会長の早田輝洋教授、実は早田輝洋先生も北京大平学校時代と九州大学研究生時代の



恩師である。早田氏は、日本語アクセントは声調型のアクセントがある（鹿児島や近畿など）と主張し、「声調という術語を音節のみが担うものと限定せず、単語や形態素も担えるものと定義すれば、日本語の声調を漢語（漢族の言語）をはじめとする中国大陸の種々の言語・方言の声調とも比較できることになる」（早田輝洋 1999）と指摘している。体系の異なる言語は比較できないと考えている研究者が多く、今までの「日中対照研究」はやがて「日中比較研究」になる時代がくるかもしれない。言語学の進歩である。

日本語でいう「音調」とは、広義のアクセントで、イントネーションやプロミネンスも研究対象である。音声学研究においては「音調」の研究は新しい研究課題であり、注目されたい。

2.1.日本語アクセントの成立—東京と名古屋の関係

東京には「山の手言葉」と「下町言葉」があるが、「下町言葉」は京阪語を基にした町人言葉であるのに対して、「山の手言葉」は武家言葉として現代日本語の共通語の母体となる方言である。この武家言葉とは、名古屋の将軍徳川家康が 1590 年江戸入国後、名古屋近辺三河から江戸に大挙移住した徳川家臣団の武士たちが使う言葉である。山口幸洋 2003 によると、名古屋近郊の岡崎のアクセントは東京アクセントとほぼ完全に一致していることがわかっている。筆者は名古屋に在住 18 年になるが、発音は東京方言と違いがあっても、アクセントは東京アクセントと全く同じであり、違和感がない。ところで、いざ名古屋西部近郊の大垣と四日市に行くと、もうアクセントは京阪アクセントになってしまう。

中国は歴史上「官話」というものが存在した。いまは言わないが、権力者の言葉や支配者階級という言葉は「官話」であり、この「官話」こそ、言語交流や言語融合において大きな役割を果たしていたことはいままでもない。武家言葉は日本語の標準語の母体となったのも、例外ではない。

2.2.厦門語の変調と日本語の変調

中国語の声調は本来、四声（平声・上声・去声・入音）×陰調・陽調で八声調があるが、歴史的に長い言語交流と言語融合のなかで、北京語の場合は周知のように四声調しかなくなった。これも便宜上、四声と言っているが、厦門語は北京語とは違って、本調(Basic Form)は七声調あり、そしてこの七声調の変調(Sandhi Form)はまたそれぞれ七声調があることは、厦門方言及び閩南方言にしか見られない特徴である。

厦門語の本調と変調は下記のようにまとめることができる。

第一声：[本調] 陰平半高平調，調値 44，環境：44→44/ __+（0 と轻声）

[変調] 陽去中高平調，調値 33，環境：44→33/ __+（0 と轻声以外）

第二声：[本調] 陽平中昇り調，調値 24，環境：24→24/ __+（0 と轻声）

[変調] 陽去中高平調，調値 33，環境：24→33/ __+（0 と轻声以外）

第三声：[本調] 陰上高降り調，調値 53，環境：53→53/ __+（0 と轻声）

[変調] 陰平半高平調，調値 44，環境：53→44/ __+（0 と轻声以外）

第四声：[本調] 陰去低降り調，調値 21，環境：21→21/ __+（0 と轻声）

[変調] 陰上半高降調，調値 32，環境：21→32/ __+（0 と轻声以外）

第五声：[本調] 陽去低平ら調，調値 22，環境：22→22/ __+（0 と轻声）

[変調] 陰去低降り調，調値 21，環境：22→21/ __+（0 と轻声以外）

第六声：[本調] 陰入中降短促調，調値 32，環境：32→32/ __+（0 と轻声）

[変調] 陽入半高短促調，調値 4，環境：32→4 / __+（0 と轻声以外）

第七声：[本調] 陽入半高短促調，調値 4，環境：4 →4 / __+（0 と轻声）

[変調] 陰去低降短促調，調値 21，環境：4 →21/ __+（0 と轻声以外）

厦門語の声調は「七声声調」であるとは言うものの、七声声調の「本調」のほかに、それぞれ「変調」があり、あわせて十四声あると見ることができる。ただし、第一声と第二声の変調，第三の変調と第一声の本調，第五声の変調と第四声の本調及び第六声の変調と第七声の本調はそれぞれ同一の調類であることによって厦門語の調類は以下のように十声調とすることができる。

厦門語の声調調類

第一声：陰平半高平調，調値 44，第三声の変調。

第二声：陽平中昇り調，調値 24，



- 第三声：陰上高降り調，調値 53，
- 第四声：陰去低降り調，調値 21，第五声の変調。
- 第五声：陽去低平ら調，調値 22，
- 第六声：陰入中降短促調，調値 32，
- 第七声：陽入半高短促調，調値 4，第六声の変調。
- 第八声：陽去中高平調，調値 33，第一声と第二声の変調。
- 第九声：陰上半高降調，調値 32，第四声の変調。
- 第十声：陰去低降短促調，調値 21，第七声の変調。

一方、日本語のアクセントはこれも方言によっては様々であるが、変調に関して言えば、廈門語の変調と似ているところが面白い。

例えば、名古屋^{なごや}①+駅^{えき}①=名古屋駅^{なごやえき}③、廈門^{あもい}①+大学^{だいがく}=廈門大学^{あもいだいがく}④。いずれも③型のアクセントのパターンであるが、このように、廈門語も日本語も、後続する言葉によって、前の言葉のアクセントは変調する点は共通しているところである。

2.3. 日本語アクセントの統語機能

声調やアクセントはそもそも弁別機能が大事である。北京語では「买马^{máimǎ}」と「埋马^{máimǎ}」では前後関係がなければ非常に意味がとりにくいが、このような語は少ない。ところで廈門語はほとんどすべての語が2つの声調（本調と変調）を持っているため、廈門人以外ではそれを聞き分けるのに非常に苦労する。

声調は中国語にとって非常に大事な弁別要素である。例えば、声調の規則に沿わない歌曲は、声調の機能が皆無に近い場合、中国人でも、新しい歌曲を聴いても分からない言葉が続出するであろう。

これに対して日本語ではそんなことはない。ほとんど開音節の語であり、歌曲では長音でも撥音でも有声音であるからきれいに歌うことができる。したがって、日本語の歌曲は恐らく世界で一番聞いてわかりやすい歌曲だと思う。逆に言うと、日本語のアクセントは意味を弁別する上では大して役割を果たさないとも言えるところである。

例えば、「箸^{はし}①」と「橋^{はし}」、「雨^{あめ}①」と「飴^{あめ}」は、確かにアクセントは違うが、会話の中で意味を間違えて聞き取ることはめったにない。

では、日本語のアクセントはどんな機能が大事であるか。

非弁別機能。いわゆるアクセントの違いによってどこの出身者であるかがわかること。非弁別機能は意味の区別はできないが、人の声や特徴、らしさがわかる。声を聞いて男性か女性か、身内か他人かなど。このような能力は人間には一般に備えており、病気と意外など以外に、自分の親の声や子供の声、クラスの友達の声の聞けば分かるはず。もしこれは分らないと、日本で数百億円にものぼる被害に遭ってしまった例の「おれおれ」詐欺の結果になりかねない。

統語機能。何事も規則がある。日本語アクセントの規則は、アクセントがある場合は、一語はアクセント核が一箇所しかない。単語のアクセントは辞書に載っているため、アクセント辞典で覚えればよい。しかし、複合語のアクセントや文アクセントはアクセントの規則を適用しなければならない。この統語機能こそ、日本語アクセント機能の最も大事な機能ではないだろうか。

日本語アクセント規則の中では、複合名詞のアクセントは後部の語の第一拍目まで高い中高型の語が多く、非常に規則的である。したがって、多音節語や複合語のアクセントの習得には平板型を中心に高く平らなアクセントの訓練をし、③型のアクセントのパターンをしっかりと身につけることが学習や指導のポイントとなる。

おわりに

物事は角度を変えてみると違って見えることもあるように、研究も角度を変えて進めてみると今まで発見しなかったものが見えてくることもある。外国語教育における音声学研究はまだまだ多くの課題があり、学習者の母語と習得言語との比較対照研究はこれからも非常に有効な方法ではないだろうか。



【付】言葉のリズムと歌詞の翻訳

翻訳は異文化交流、異文化共有の最も大事な技術であり、外国語習得者の特権でもある。

日本語も中国語も言葉のリズムがあるが、話す言葉では、日本語は2拍が、2音節が基本リズムであるのに対して、中国語では4字語、4音節が多いように思う。詩の場合は、日本語と中国語は更に違う。日本語は詩でも言葉のリズムが大事である。例えば、俳句や短歌など、五・七・五や五・七・五・七・七のリズム通りに作詩するが、中国語の場合、五言絶句、七言律詩のようにリズムが設定され、それよりも平仄や韻を踏むことが大事である。

歌詞の場合は、言葉のリズムと音楽のリズムは合わなければならない。次のように、歌詞のリズムは分かりやすい場合、曲のリズムも分かりやすい4/4,2/4の調子が多く、歌詞のリズムは少しずらしたものと、曲のリズムも3/4,6/8などが多いように思う。

次の日本歌曲と中国歌曲を比べると、日本歌曲は五・七・五のように五語の歌詞が多く使われていることがわかる。一方、中国歌曲の場合は、やはり七語の歌詞が多く使われていることが分かる。

このように、歌詞のリズムが言語のまま活かして、同じ数の訳語で訳した場合は、最も原語のリズム感が伝わることと思う。

ただし、一語数音節もある日本語の歌詞と一語一音節の中国語の歌詞は対訳するときには数合わせが大変技術を要求される場所である。日本語の歌詞を中国に訳す場合、多くの言葉を足さなければ言葉の数が合わないし、逆に中国語の歌詞を和訳するときには、言葉が足りずに苦慮してしまうことが多い。

翻訳研究のテーマの一つとして、歌曲の対訳研究をおすすめしたい。

日本歌曲の漢訳

【椰子の実】1=A 4/4

五・七・五・七・五・七・五・七

なもしらぬ	とおきしまより	ながれよる	やしのみひとつ
从那远方的	不知何名的海岛	漂呀漂呀漂	来了一个椰子果
ふるさとの	きしをはなれて	なれはそも	なみにいくつき
你离开了故	乡的海岸漂呀漂	你漂呀漂了	多少日子才来到

【浜辺の歌】1=F 6/8

七・五・七・五・六(+1)・六(-1)・六(+1)・六(-1)

あしたはまべに	さまよえば	むかしのことぞ	しのぼるる
如果清晨去海边	去海滨漫游	一定会想起往事	往事情绵绵
かぜのおとよ	くものさまよ	よするなみも	かいのいろも
风儿呀在呼唤	云儿呀在召唤	海浪在歌唱呀	海贝美丽闪亮

【赤とんぼ】1=E_b 3/4

八・五・八・五

ゆうやけこやけの	あかとんぼ	おわれてみたのは	いつのひか
晚一霞呀洒满天空	红蜻蜓飞翔	骑在背上身在景中	同年好时光

【朧月夜】1=C 3/4

八・六・八・六・八・六・八・六

なのはなばたけに	いりひうすれ	みわたすやまのは	かすみふかし
油菜花黄田野一片	夕阳已落下山	群山一片暮色苍茫	山村烟雾飘荡
はるかぜそよふく	そらをみれば	ゆうずきかかりて	においあわし
春风春风轻轻吹过	抬头把天空望	一轮月儿挂上天边	淡淡花香醉人

【夕焼小焼け】1=C 2/4

八・五・八・五・七(+1)・五・八・六(-1)

ゆうやけこやけで	ひがくれて	やまのおてらの	かねがなる
晚霞灿烂红满天空	夕阳快落山	山冈上寺庙里的	钟声阵阵响
おてつないで	みなかえろ	からすといっしょに	かえりましょう
我和你呀手拉手	大家一起走	鸟儿伴着我们歌唱	回家的路上

【故郷】1=G 3/4

六・四・六・四・六・四・六・四

うさぎおいし	かのやま	こぶなつりし	かのかわ
小白兔任你赶	在那山冈	小鲫鱼任我钓	在那河旁
ゆめはいまも	めぐりて	わすれがたき	ふるさと
同年憧憬向往	仍在心中	故乡山青水秀	永远难忘



【里の秋】 1=F 4/4

八・五・八・五・七・五・八・五
 しずかなしずかな さとのあき おせどにきのみの おちるよは
 静悄悄啊静悄悄的 故乡的秋夜 后院栗树结满果实 落地声声响
 ああかあさんと ただふたり くにのみにてます いろりばた
 啊啊只有娘和俺 两人守家门 锅里煮着栗子飘香 围坐在炉旁

中国歌曲の和訳

【长江之歌】 1=Bb 4/4

六・七・六・七・七・六・七・六・六・七・六・七
 你从雪山走来 春潮是你的丰采 你向东海奔去 惊涛是你的气概
 ゆきやまから はるかぜにのり なみうちながら ひがしへとゆく
 你用甘甜的乳汁 哺育各族儿女 你用健美的臂膀 挽起高山大海
 あなたのむねに そだてられて ちきゅうのいのちのははなるかわよ
 我们赞美长江 你是无穷的源泉 我们依恋长江 你有母亲的情怀
 うつくしいながれ ゆたかなこころ こいしいははよ われらのたいが

【草原上升起不落的太阳】 1=A 2/4

八・七・七・五・十
 蓝蓝的天上白云飘 白云下面马儿跑 挥动鞭儿响四方 百鸟齐飞翔
 あおいそらしろいくも かけめぐうま むちをならして とりはとぶ
 草原上升起不落的太阳
 そうげんにのぼるかがやくたいよう

【茉莉花】 1=D 2/4

九・九・七・七・七・五・七
 好一朵美丽的茉莉花 好一朵美丽的茉莉花 芬芳美丽满枝芽
 きれいなモリファー きれいなモリファー こぼしいかおり
 又香又白人人夸 让我来将你摘下 送给别人家
 しろい はなよ ひとつあなたに こころのはな
 茉莉花呀茉莉花
 モリファーやモリファー

主要参考文献

- 羅常培、1956、『厦門音系』、科学出版社
 朱新建、1992、『厦門語と日本語の音声の比較』、名古屋大学
 陳榮嵐・李熙泰、1994、『厦門方言』、鷺江出版社
 周長楫・歐陽憶耘、1998、『厦門方言研究』、福建人民出版社
 早田輝洋、1999、2、『音調のタイポロジー』、大修館
 朱新建、2000、3、『中国語に見られる入破音の研究』、愛知学院大学
 山口幸洋、2003、9、『日本語東京アクセントの成立』、港の人
 丁邦新・張双庆、2002、『閩語研究及其与周边方言的关系』、香港中文大学出版社

【発表者紹介】

朱新建、75級厦門大学日本語学科学生を経て、82年に同研究科修士課程修了。「共通語アクセントの研究」と題する修士論文を吉林大学に論文審査を申請し、日本文学碩士号を取得。82年9月より86年9月まで同学科にて教鞭をとる。86年10月より日本留学。九州大学言語学科研究生を経て、88年名古屋大学文学研究科日本語文化専攻修士課程に入学、90年に「厦門語の齒茎子音と日本語の齒茎子音との比較研究」と題する修士論文を提出し、名古屋大学より学術修士号を取得。同年4月に同研究科博士課程後期課程に進学し、94年3月に単位取得満期退学。同年4月に現職愛知学院大学教養部外国人教師に就職し、「中国語」、「中国文化事情」など担当し、現在に至る。このほか、名古屋大学講師、毎日文化センター中国二胡教室講師、茉莉花二胡合奏団顧問を勤める。著書には、『跟我学汉语』（中国語教科書）、『三十五年的新闻追踪』（翻訳・共著）、『二胡独奏曲 櫻花縁』（楽譜本・編著）などがある。